

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Effectiveness of Linguistic Tests for Identifying Polysemy in Nouns, Adjectives, and Verbs in Contemporary Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西内, 沙恵, NISHIUCHI, Sae メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003691

多義性を認める言語学的テストの有効性

——現代日本語の名詞・形容詞・動詞を対象に——

西内沙恵

北海道教育大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿では多義語が有する複数の意味をどのように確認できるか、言語学的方法に焦点をあてて検討する。多義語は同一の音形に意味的に何らかの関連を持つ二つ以上の意味が結びついている語と定義される。多義語の語義の粒度は研究の目的や研究者の立場によって異なるため、多義性を認める方法も言語学的方法と心理実験的方法からさまざまに考案されてきた。本稿では先行研究で提案されてきた、多義性を認める言語学的方法を、語彙テスト・文法テスト・論理テストに区分して一覧し、その有効性を検討する。それぞれのテストがどのような仕組みによって成り立っているかを分析し、どの程度の粒度で語義が認められるかという観点から各テストの特徴を論じる。現代日本語の名詞・形容詞・動詞を対象にそれぞれのテストが有効に働く品詞を検討し、その適用範囲を示す*。

キーワード：多義性、語彙テスト、文法テスト、論理テスト、現代日本語

1. はじめに

本稿では多義語が有する複数の意味をどのように確認できるか、という多義性を認める方法を検討する。多義性とは、単一の言語形式に二つ以上の互いに関係のある意味が結びついていることである (Taylor 2012)。多義性の概念は語に限らず、拘束形態素や構文など様々な単位に適用される。そのうち語が多義性を有することを認めるとき、いくつの意味に区分するか、すなわち異なる意味間の線引きをどこで設けるかは、多義性をめぐる議論において主要な問題の一つである。語の多義性をめぐる課題として柗山 (2019) は (1) をあげており、本稿では (1a) 何らかの程度の自立性を有する複数の意味の認定を目的とする言語学的テストの分析に取り組む¹。

- (1) a. 何らかの程度の自立性を有する複数の意味の認定
- b. プロトタイプの意味の認定
- c. 複数の意味の相互関係の明示
- d. 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明 (柗山 2019: 34)

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」のサブプロジェクト「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」(いずれもプロジェクトリーダー：浅原正幸)の研究成果です。日本言語学会第160回大会で発表した内容に加筆修正を行いました。発表の際、重要なお助言を賜りました。また本稿の執筆にあたり、査読者の先生から有益なお指摘を賜りました。この場を借りてあつく御礼申し上げます。なおいうまでもなく、本稿の不備や誤りはすべて筆者の責任です。

¹ 柗山 (2019) にあげられる (1) の課題設定は、柗山 (2001) での提案に基づいている。

1.1 どの程度の粒度で区分を設けるか

Taylor (2012) によれば、言語学者が多義性を扱う方針は大まかに一括主義と細分主義に分けられる。一括主義の立場からは多義語の様々な語義を、類義語と区別可能な形で、抽象的な単一の意味にまとめる方針が提案される。対して細分主義の立場からは異なる用法に基づいて積極的に多数の語義が認められる。異なる用法には具体的に指示する対象の異なりも含まれる。例えば英語動詞 *open* では *open the door* で行われる具体的な動作と *open a parcel* で行われる具体的な動作が異なる。細分主義では動詞と結びつく名詞によって動作が変わりうる場合に、それぞれ異なる語義に認められる (Lakoff 1987, Taylor 2003)。

細分主義では日本語形容詞「しろい」が「しろい雪」と「しろい肌」において具体的に指示する色味が異なるため、それぞれ異なる語義として認めることができる。ただし「しろいかくろいか決着をつける」における〈犯罪に関係がなく潔白である様子〉という語義と区別するために、色調に幅がある、明度が高い色として〈色彩がしろい様子〉という語義に区分することもできる。一括主義では〈犯罪に関係がなく潔白である様子〉も〈色彩がしろい様子〉も単一の意味にまとめられる。一括主義の立場を取るとき、複数の語義の区分は問題にならないが、単一の意味からどのように多義性が解釈されているのか、解釈のモデルを構築する必要が生じる。すなわち、単一の意味がどのような形で言語知識に内在しており、具体的な使用においてどのように解釈が調整されているのかが明らかにされる必要がある。細分主義の立場では複数の語義をどのような粒度で認めるかが問題となる。細かな粒度で認める場合、具体的な指示に応じて相当数の区分が際限なく設けられ、語義間の関係や重み付けが不明瞭になる可能性がある²。本稿では多義性を認める方法を検討する目的から、一括主義の立場を取らない。各テストによってどの程度の粒度で細分化されるかを検証する。

1.2 どのようにして多義性を認めるか

多義性を実証的に認めるために、従来、言語学的テストと心理実験的手法という二つのアプローチが取られてきた。田中 (1987) によれば、言語分析の一般的なプロセスでは、経験した範例 *e* (exemplar) をもとに、観察不可能な理論値 *E* (Exemplar) が推測され、カテゴリー *X* が探られる。多義性の認定においては、次節以降で詳しく取り上げる語彙テスト・文法テスト・論理テストといった言語事実に基づく論証がこれに該当すると考えられる。対して、心理実験では図 1 のように私たち一人一人が経験世界で学習した *Se* (Specific exemplar) をもとにカテゴリー *X* と *E* が追究される。*Se* もまた「単語の意味に対する言語的直感を実証的に研究する際のデータ・ベースとなり、また、私たちの *X* 理解のベースになっている」(田中 1987: 127) 点で、言語分析に有用だという。例えば多義語の複数の語義間で想起のされやすさに違いがあることを確認する想起テ

² Taylor (2012) は多義語の意味が膨大になることに対して懸念を抱くべきではないとし、次の三つの理由をあげている。一つ目に、語義はその数に制限があるわけではない。二つ目に、語が多数の異なる意味と結びつく事実があるならば、分析に反映されるべきである。三つ目に、長期記憶に対する脳の負担は少ないため、多義性に関しては記憶容量の制約を懸念する必要がない。

スト（木下 2019）や、多義語の複数の語義間の類似度の調査（中本ほか 2004, 李ほか 2007）などがこれに該当すると考えられる。

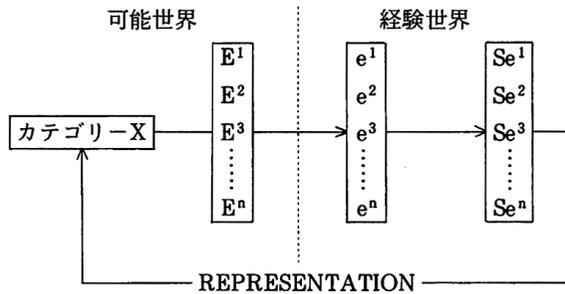


図1 語彙意味論のカテゴリー／イグゼンプラー・モデル（田中 1987: 127）

本稿では次節以降、先行研究で提案されてきた言語学的テストを語彙テスト・文法テスト・論理テストに分類し、それぞれの有効性を検討する。例えば、語彙テストには（2）のような反義語の異なり（国広 1982）、文法テストには（3）のような用法上の制約の異なり（粉山 1995）、論理テストには（4）のような等位接続による一方の否定（Quine 1960, 松本 2010）が提案されている。以降、山括弧に文の意味、もしくは文中の下線の語の意味を示す。

(2) 語彙テスト：反義語の異なり

- a. たかい木 ←→ ひくい木 〈空間〉
 b. たかい本 ←→ やすい本 〈価値〉

(3) 文法テスト：用法上の制約

- a. 花子は髪をみじかく切った。〈空間〉
 b. *私はテレビをみじかくつけた。〈時間〉

(4) 論理テスト：等位接続による一方の否定

彼は娘にあまい〈厳しくない〉。といっても、食べ物じゃないから、本当にあまい〈糖度が高い〉わけじゃない。

各テストがどのような仕組みから多義性を認める言語事実の証拠を提示するものなのかを分析し、現代日本語の名詞・形容詞・動詞を対象にどの程度の粒度で語義が認められるか、それぞれのテストの適用範囲を考察する。具体的には、名詞・形容詞・動詞ごとに適用できる（○）、適用できる場合がある（△）、適用できない（×）の三つに分類する。

2. 語彙テスト

言語事実から多義性を認める言語学的テストとして、まず語彙テストを取り上げる。語彙テストは多義語の各語義がそれぞれ異なる意味分野に属していることを利用し、各意味分野を取り巻

く関連語を手がかりとして語に多義性を認める手法である。具体的には (5) のような方法が提案されている。

- (5) a. 上下関係をなす語の体系の中で、異なったレベルに位置する。(国広 1982)
 b. 異なる反義語が存在する。(国広 1982)
 c. 異なる反対語が存在する。(靱山 1993)
 d. 異なる類義語が存在する。(靱山 1993)
 e. 異なる上位語が存在する。(靱山 1993)
 f. 異なる表記で書き分けられる。(加藤 2019)

2.1 上下関係の異なるレベル

国広 (1982) は語に多義性を認める手がかりを三つ示しており、そのうち語彙テストに該当する (5a) と (5b) を紹介している。三つ目は文法テストに該当するもので、3.1 節「形態的な異なり」で紹介する。なお、国広 (1982) はいずれの手がかりも適用範囲が限定的であることに言及している。まず (5a) から見ていく。「上下関係 (hyponymy) をなす語の体系の中で、異なったレベルに位置する場合、多義とみなす」(国広 1982: 109-110) というものである。例えば図 2 のように *thing*, *animal*, *man*, *woman*, *cow* が多義であることは、同一レベルで対立するほかの語の存在によって支えられている。

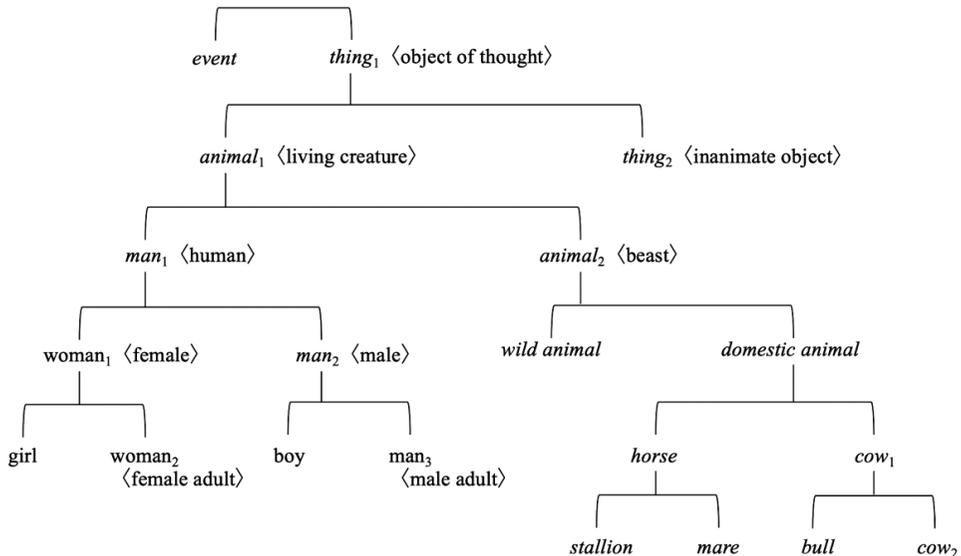


図 2 上下関係の異なるレベルにある多義性 (国広 1982: 109 を参考に)

このような上下関係をなす拡張関係をシネクドキと考えれば、類で種を表す場合だけでなく、種で類を表す表現もこれに含めることができる。例えば瀬戸 (2014) は *accident* が類としてニュー

トラルに〈思いがけない出来事〉を表し、種として〈とくに不運な出来事〉というマイナスの意味に限定される例をあげている。反対に *ship* は、種である〈荷を船で送る〉から輸送手段が限定されない〈荷を送る〉という類に一般化しているという。このような類と種の間接関係をなす包摂分類は対象のラベルとなることが多い名詞に豊富である。また一般的な表現で限定された意味を伝えるシネクドキシの表現と考えることで、動詞にも適用できる場合がある。例えば「みこむ」は本来中立的で、いい予測も悪い予測も可能だが、「私のみこんだ男」のような使用ではいい予測に偏った使用がなされる（瀬戸 2020）。形容詞も（6）のように「すごい」がニュートラルに〈程度が甚だしい〉を表す一方で、〈程度がはなはだしい〉中でも文脈によらず〈非常におそろしい〉というマイナスの意味に限定されている点で、適用できる場合がある。

- (6) a. とにかくすごい力で、歯が立ちゃしない。
 b. もりを打ちこまれたトドはすごい顔でいらんだ。

（飛田・浅田 1991: 304 下線は筆者による。）

2.2 異なる反義語

次に（5b）「異なった反義語が存在している」（国広 1982: 110）という語彙的な手がかりの有効性を検討する。反義語とはある一つの意義特徴の点で反対の関係にある二つの語の一方である。ここでいう反義語には「あつい」と「つめたい」のような中間段階を持つ連続的反義と、「しんでいる」と「いきている」のような中間段階を持たない両極的反義が含まれる（国広 1982）。国広（1982）では英語形容詞 *solid* を例に、（7）のように語義に応じて異なる反義語と対応関係をなすことが示されている。

- (7) a. of stable shape 〈固体の〉 ↔ *liquid, fluid*.
 b. of such material throughout 〈中味の詰まった〉 ↔ *hollow*.
 c. of the same material throughout 〈中まで同じ物質の〉 ↔ *plated* 〈めっきの〉
 d. of strong material or construction or build 〈構造がしっかりしている〉 ↔ *flimsy, slender, &c.*
 e. of three dimensions 〈立体の〉 ↔ *linear, superficial, &c.* (国広 1982: 110)

形容詞は様々な程度表現を伴う段階性を持ち、連続的反義の関係を持つ語が多い（西尾 1972）。Cruse (2011: 191-198) は連続的反義に極性・平衡・重複という三つの尺度の構造があるとしている。日本語形容詞はいずれの尺度にも該当する語があり、異なる反義語のテストが適用できる。例えば「やわらかい」は（8）のように対応する反義語が異なっている。異なる反義語から、物理的な特性と人間に対する印象という別の意味分野に属する複数の語義が確認できる。

- (8) a. やわらかい素材 ↔ かたい素材 〈物理的な特性〉
 b. 人あたりがやわらかい ↔ 人あたりがきつい 〈人間に対する印象〉

また動詞と名詞も反義語を持つことがあり、(9)と(10)のように適用できる場合がある。

- (9) a. ドアがあいている ↔ ドアがしまっている
 b. 席があいている ↔ 席がうまっている
- (10) a. よごれが目立つ ↔ きれいさが目立つ
 b. よごれ仕事 ↔ 人気の仕事

ただし、反義語の異なりは分析の対象とする語と反義関係にある語とが同じ拡張プロセスを経た多義性を有する場合には有効に働かない。例えば「あかるい」は〈光がある〉と〈人間の性格〉という異なる意味分野に属する複数の語義を有していると考えられるが、(11)のように反義語の異なりからは多義性が認められない。

- (11) a. あかるい部屋 ↔ くらい部屋 〈光がある〉
 b. あかるい性格 ↔ くらい性格 〈人間の性格〉

2.3 異なる反対語

栩山(1993)では国広(1982)で提案された(5a)と(5b)を踏まえ、(5c)から(5e)が提案されている。まず(5c)「反対語の違いも多義的別義を認定する基準の1つになろう」(栩山1993: 50)という反対語を手がかりとする手法から見ていく。反対語は「かう」、「うる」のようにある出来事や関係をあい対する観点から眺めて表現され、一方が成立するときもう一方も同時に成立するような反対関係をなす語を指す。栩山(1993)は(12)から(14)のように「かう」の語義に応じて反対語が非対応となる例をあげている。「かう」は(12)のような〈購入する〉では反対語として「うる」が対応する。一方で、(13)のような〈悪感情を持たれる〉、(14)のような〈高く評価する〉を表すとき反対語として「うる」を取ることができない。(13a)と(14a)に相当する表現を「花子」の視点から述べれば(13c)と(14c)のようになり、反対語はそれぞれ「もつ」、「うったえる」となる。なお、(14a)と(14c)は同一の出来事を描写しているとは必ずしもいえない、「おしえる」と「おそわる」のような期待的反対関係(国広1982)をなす関係だという。いずれにしても(12)から(14)のような反対語の違いは〈購入する〉、〈悪感情を持たれる〉、〈高く評価する〉という三つの語義が「かう」という単一の形式に存在することを支える言語事実であり、多義性を認める基準の一つとして適用できる。

- (12) a. 太郎は花子から本をカッタ。
 b. 花子は太郎に本をウッタ。
- (13) a. 太郎は花子から／花子の恨みをカッテいる。
 b. ×花子は太郎に恨みをウッテいる。
 c. 花子は太郎に恨みをモッテいる。
- (14) a. 太郎は花子のやる気をカッタ。
 b. ×花子は太郎にやる気をウッタ。

- c. 花子は太郎にやる気をウツタエタ。(初山 1993: 49)

反対語の異なりは名詞にも適用できる場合がある。「子」は (15) のように〈生まれて間もなく十分育っていない生物〉では反対語として「親」が対応する。一方で (16) のように〈若い人〉を表すとき反対語として「親」を取ることができず、話者の視点から述べれば反対語は「先輩」となり、語義に応じて反対語が非対応となる。

- (15) a. 太郎は花子の子だ。
 b. 花子は太郎の親だ。
 (16) a. 駅で会社の子に会った。
 b. * 駅で会社の親に会った。
 c. 駅で会社の先輩に会った。

形容詞ではある出来事や関係に対して常に反対関係の表現が成り立つとは限らないため、反対語の異なりが適用できない。AさんとBさんが同時に同じ部屋を見て、それぞれが「ひろい」とも「せまい」ともいえるように、同時に同一の対象に対して異なる評価が可能である(八亀 2003)。話し手の中の何らかの基準と比較されるため、あい対する観点から眺めて表現することは可能だが、一方が成立するときもう一方も同時に成立するとは限らない。

2.4 異なる類義語

初山 (1993) で二つ目に提案される, (5d) 「類義語の違いということも, 最も素朴な手掛かりではあろうが, 多義的別義を認定する 1 つの基準になる」(初山 1993: 51) ことを検討する。類義語はいい換えたときに意味のずれが少ない語である。初山 (1993) は「きたない」, 「おかしい」, 「つめたい」を例に複数の語義と異なる類義語との対応関係を (17) から (19) のように示している。「きたない」は (17a) と (17b) のように語義に応じた類義語が「よごれた」, 「ずるい」と異なっている。「おかしい」も (18a) と (18b) のように類義語が「変だ」, 「おもしろい」と異なっており, 「つめたい」も (19a) と (19b) のように類義語が「ひんやりとした」, 「冷淡だ」と異なっている。初山 (1993) が形容詞を例に論じているように, この手法は形容詞に適用できる。形容詞の多義性がメタファーによるカテゴリー横断的なものが多いためと考えられる。

- (17) a. 太郎はいつもキタナイ服を着ている。(類義語: よごれた)
 b. あいつのやり方はキタナイ。(類義語: ずるい)
 (18) a. その考え方はオカシイ。(類義語: 変だ)
 b. あの人の話はいつ聞いてもオカシイ。(類義語: おもしろい)
 (19) a. ツメタイ風に当たった。(類義語: ひんやりとした)
 b. Aさんは急にツメタイ態度をとった。(類義語: 冷淡だ)

(初山 1993: 50-51 括弧は筆者による。)

類義語は同じ意味領域の語を利用するため、実質的な意味を有する内容語である動詞や名詞にも適用できる。(20)と(21)もそれぞれ、文中の語と対応する類義語が異なる点で多義性が認められる。

- (20) a. 鳥が空をとぶ。(類義語：羽ばたく)
 b. 取材のため現地にとぶ。(類義語：急ぐ)
- (21) a. スーツケースに鍵をつけた。(類義語：錠前)
 b. この暗号が事件解決の鍵だ。(類義語：手がかり)

ただし、類義語の異なりは類義関係が多岐にわたるために語義の区分が際限なく設けられてしまうという問題点がある。(22a)と(23a)は〈温度が低い〉という意味では共通しているが、類義語間では快不快の違いがある。(22b)と(23b)は〈思いやりがない〉という態度としては共通しているが、悪質さの度合いが異なっている。いずれも、ある一定の意味が文脈によって具体的に別の意味に見える文脈の変容(舩山 1993)の差異と考えられるが、類義語の異なりという基準では多義性を認める判断材料になりうる³。

- (22) a. ツメタイ風に当たった。(類義語：ひんやりとした)
 b. Aさんは急にツメタイ態度をとった。(類義語：冷淡だ)
 (舩山 1993: 50 括弧は筆者による。)
- (23) a. つめたい北風に身を縮ませた。(類義語：凍えそうだ)
 b. Aさんはつめたい仕打ちを受けた。(類義語：邪険だ)

2.5 異なる上位語

舩山(1993)で三つ目に提案される、多義性が(5e)「上位語の違いからも確認できる」(舩山 1993: 51)という手法を検討する。二つの語が上位語と下位語の関係にあることは、「AというB」という表現によってAを下位語、Bを上位語に位置付けられる。「[名詞1]という[名詞2]」は「田中という人」のような〈[名詞1]という名前を持つ[名詞2]〉、また「教師という職業」のような〈[名詞1]が属する範疇が[名詞2]〉を表す(益岡・田窪 1992)。舩山(1993)は「AというB」という表現によって、下位語Aに対して複数の上位語Bの存在を確認することで、下位語Aの多義性が認められるとしている。(24)では下位語「赤」に対して「色」と「思想」という異なる上位語が存在することから、「赤」に〈色彩〉と〈政治的思想〉という複数の語義が結びついていることが確認できる。

- (24) a. アカという色
 b. アカという思想 (舩山 1993: 51)

この手法は上位語で表される意味領域が細分されている名詞には適用できるが、動詞には適用

³ 文脈の変容は国広(1982: 108-109)では語用論的多義、池上(1975: 135-136)では一般的意味とも呼ばれる。

できない場合がある。例えば (25a) と (25b) のように動詞が表す異なる動作は、いずれも上位語には違いがないため、多義性が認められない。なお、(25c) のような動作以外の上位語を取りうる意味であれば区分可能である。

- (25) a. (鳥が) とぶ〈羽ばたく〉という動作
 b. (現地に) とぶ〈急ぐ〉という動作
 c. (ページが) とぶ〈間が抜ける〉という状態

この手法は形容詞には適用できない場合がある。(26) のように形容詞の非過去形では後続する「という」に〈伝聞〉の解釈が可能になり、上位関係の解釈が曖昧になる。また〈伝聞〉の解釈で「あたたかいという感想」が非文ではないため、余分な語義が認められる可能性がある。(27) のように接尾辞を付加し名詞化することで適用できるかもしれないが、接尾辞は「さ」のほか、「み」、「げ」など複数付加できる場合があるため、操作が煩雑になる。また品詞の転成によって継承されない語義が存在する可能性がある。山崎 (2011) によれば、和語の動詞が多義語である場合、動詞の転成名詞よりも動詞のほうが意味の数が多い。形容詞とその転成名詞も同様の関係があるとしたら、転成名詞に「A という B」の手法を適用しても、形容詞の多義性が正確に認められるとはいえない。

- (26) a. あたたかいという気温
 b. あたたかいという人柄
 (27) a. あたたかさという気温
 b. あたたかさという人柄

2.6 異なる表記

語彙テストの最後に (5f) 「表記のばらつきと語義のばらつきが生じる多表記かつ多義の語を見ると、概ね表記によって語義判定が異なる」(加藤 2019: 92) ことを検討する。加藤 (2019) は同じ語が異なる表記で書き分けられる「表記ゆれ」が多義語でどのように起きているか、『BCCWJ-WLSP』(分類語彙表番号つき『現代日本語書き言葉均衡コーパス』)(加藤・浅原・山崎 2019) から調べている。調査の結果、異なる表記と読み手の語義判定が対応する場合があり、表記が読みを補助しているとしている。例えば日本語動詞「あう」は (28b) 「会う」という表記では〈出会い〉と〈応接・送迎〉に、(28a) 「あう」と (28c) 「遭う」という表記では事故などの〈人生・禍福〉に語義が判定される傾向があるという。

- (28) a. あう
 b. 会う
 c. 遭う

名詞や形容詞でも「風」と「風邪」、「暖かい」と「温かい」のように一つの形式が複数の表記

を持つことがあり、表記に応じて異なる意味が表し分けられる傾向があると思われる。例えば「あたたかい」は気温の高さを表すとき「暖かい」の表記が、物体の温度や人の体温・性格を表すとき「温かい」の表記が使われる。

ただし、全ての語で多義性と表記に対応関係があるわけではない。例えば形容詞「きたない」は「汚い」と「穢い」のように複数の表記を持つが、〈よごれている〉も〈ずるい〉も「汚い服」「汚いやり方」のように表記できる。

鈴木（1989）によれば、奥田（1985）は前身となる論考において、多義語が表記を受けて成り立つわけではないことから、訓読みの漢字を使い分けることの問題を論じているという。例えば「みる」という語が「見る」、「看る」、「観る」、「視る」、「診る」、「覧る」と書き分けられることはむだだと考えられている。また飛田・浅田（1991）も「漢字表記の違いと「形容詞」の語としての意味区分とは、必ずしも厳密には一致しない」（飛田・浅田 1991: ix）ことから、表記の違いによって語を分類せず、一般的な傾向としてどの漢字を使うかという記述にとどめている。解釈を補助する同訓異字もあるが全てではないと考えられる。本稿でも表記に多義語の複数の語義が担われていることを前提とせず、多義語の有する複数の意味を表し分ける傾向を形成する要素として考えることとする。

3. 文法テスト

次に文法テストを取り上げる。文法テストは語義に応じて使用できる文法によって、語に多義性を認める手法である。複数の意味がそれぞれ異なる文法的な用法を有していることを利用し、特徴的な文法を適用した際の容認可能性の違いや解釈の違いによって多義性を認定する。具体的には（29）のような方法が提案されている。それぞれの仕組みを次節以降見ていく。

- (29) a. 形態的な相違がある。（国広 1982）
 b. 用法上の制約がない／少ない。（初山 1995）
 c. 格体制が異なる。（仁田 1980, 仁田 2010, 初山 2012）
 d. 共起する副詞が異なる。（高橋 2016, 早瀬 2018, 有蘭 2019a, 有蘭 2019b）

3.1 形態的な異なり

国広（1982）で紹介される多義性を認める三つの手がかりのうち、(29a)「形態論的な相違が手掛かりになることがある」（国広 1982: 110）は文法テストに該当する。国広（1982）は性数の形態的な相違を手がかりに多義性が認められる例に（30）から（32）をあげている。

- (30) a. index〈指数〉の複数形 → indices
 b. index〈索引〉の複数形 → indexes
 (31) a. penny〈貨幣〉の複数形 → pennies
 b. penny〈価格〉の複数形 → pence
 (32) a. louse〈シラミ〉の複数形 → lice

- b. louse 〈軽蔑すべき奴〉の複数形 → louses

(30) から (32) における英語名詞は語義に応じて異なる複数形の形態を持つことから多義性が認められる。また性の区別を持つ言語では性別も手がかりになることがあるという。(33) は語の多義性が男性名詞か女性名詞かという形態的な相違に支えられるフランス語名詞の例である。

- (33) a. le pendule 〈男性名詞：振り子〉
b. la pendule 〈女性名詞：置き時計〉

ただし意味の違いに関係なく異なる形態が用いられる場合もあるため、形態的な相違はあくまで補助的な手がかりだと説明されている。例えば〈付加物〉、〈虫垂〉を表す appendix はいずれの語義かに関係なく、複数形 appendices, appendixes の両方が用いられるという。本稿で分析の対象とする現代日本語は性数の曲用をしないため、形態的な相違は多義性を認める手がかりに用いにくいと考えられる。なお、日本語の多義語に語義に応じた形態的な相違が見られないわけではない。多義語の語義と活用形の分布を計量的に調べた山崎 (2011) によれば、多義語は語義ごとに特定の活用形に偏って現れる。山崎 (2011) は動詞と形容詞を対象に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で頻度調査を行っている。「あまい」は連用形促音便に活用し、「甘かった」という語形で実現するとき、111 例中 89 例と、8 割も〈厳しくない〉に偏っていたという。また「甘すぎる」は「甘すぎず」では〈味・香り〉に偏り、「甘すぎる」と「甘すぎた」では〈厳しくない〉に偏って使用されていたことが報告されている。語によって活用形の偏り方が異なる可能性があるものの、活用がある動詞と形容詞は適用できる場合がある。

3.2 用法上の制約の異なり

(29b) は多義語の複数の意味のうち「用法上制約がない、あるいは少ないものをプロトタイプの意味と認定し、用法上制約のあるものを非プロトタイプの意味（転義）と考える」（舩山 1995: 626）ことを援用する手法である。舩山 (1995) は〈空間〉と〈時間〉を持つ日本語形容詞の多くが〈空間〉をプロトタイプの意味として持つことを実証する研究である。用法上の制約の異なりによって「プロトタイプの意味を認定するということは、多義的別義間の関係を捉えることに直結する」（舩山 1995: 623）と述べているように、多義性の認定にも活用できる。具体的には形容詞が語義に応じて副詞化しにくいことや決まった名詞としか結びつかないという慣用的な事例をあげている。例えば「ちかい」は (34) のように〈時間〉には名詞化「ちかく」に格助詞が後続する用法に制約があるという。

- (34) a. やっとの思いで大声をあげて助けを求め、近くの人の手を借りて家に入ると同時に一一〇番でこのことを警察に通報した。〈空間〉
b. 日本から来たての人を車にのせて家に送ると、十中八、九は下りてから、車が角を廻るまで、下りた近くに立って見送ってくれる。〈空間〉
c. ×チカクにオリンピックが開催される。〈時間〉

(初山 1995: 631 山括弧は筆者による。)

また「みじかい」は (35) のように〈時間〉には副詞化が難しいという制約があると述べている⁴。

- (35) a. 花子は髪をミジカク切った。〈空間〉
 b. ×私はアメリカにミジカク滞在した。〈時間〉(初山 1995: 634 山括弧は筆者による。)

このほか「あさい」や「ふかい」では〈空間〉を表すとき様々な名詞と結びつくのに対して、〈時間〉を表すとき (36) のような決まった名詞と限定的に結びつく点で、〈空間〉より用法上の制約があるとしている。

- (36) a. あさい「日」, 「年」, 「キャリア」, 「歴史」, 「春」
 b. ふかい「秋」, 「夜」〈時間〉

用法上の制約の異なりは初山 (1995) で示される形容詞の例のほか、名詞と動詞にも適用できると考えられる。名詞は(37)のように語義に応じて共起が義務的な場合がある。また動詞は(38)のように語義ごとに動詞と複合できるかが異なる。

- (37) a. (指定の) 椅子についた。〈座る道具〉
 b. * (大臣の) 椅子についた。〈地位〉
 (38) a. 声を張りあげる。〈大きな声を出す〉
 b. * 胸を張りあげて歩く。〈ゆるみなく延ばす〉

⁴ 形容詞の副詞化に用法上の制約が生じる要因は、語義に応じて修飾する動詞との関係が異なる点にあると考えられる。日本語の形容詞は (iii) のように状態記述二次述部で成立しない (竹沢 2001) ため、結果二次述部として作例する必要がある。主動詞から意味役割を付与される名詞句に対して新たな叙述を付加する二次述部のうち、状態記述二次述部は主動詞が担う時制辞が指し示す時点で参加者が有している状態を表す。結果二次述部は主動詞が表す出来事の結果、その出来事に参与する要素が最終的に至る結果状態を表す。竹沢 (2001) によれば、英語では (i) のように二次述部に形容詞句が特別なマーカーを伴わずに、主動詞の取る項に対して補助的な叙述を与える。一方、日本語では (ii) のように結果二次述部としては用いることができるが、(iii) のように状態記述二次述部としては用いることができない。

- (i) a. His hair grew long (His hair is long.)
 b. John left nude/angry/drunk (John is nude/angry/drunk) (竹沢 2001: 238)
 (ii) 彼の髪が 長く 伸びた (彼の髪が長い) (竹沢 2001: 239)
 (iii) a. * 花子がパーティーに 美しくて 出席した (花子が美しい)
 b. * 太郎が { 魚を 生臭くて / 肉を 固くて / 料理を 辛くて } 食べた (魚が生臭い / 肉が固い / 料理が辛い)
 c. * 太郎が車を 古くて 買った。(車が古い) (竹沢 2001: 240)

ただし結果二次述部であっても、(iv) のように主動詞が主語の変化を表している場合にも多義性に応じて文の容認可能性に差が生じることがある。初山 (1995) に提案される用法上の制約は多義性に応じて修飾する動詞との関係が異なることを利用し、容認可能性の差から多義性を認めようとするものと考えられる。

- (iv) a. 彼の髪が長く伸びた。〈空間〉
 b. * 彼との話が長く盛り上がった。〈時間〉

3.3 格体制の異なり

柁山（2012）では仁田（2010）を参考に、多義的な用言が（29c）「異なる格体制に対応する異なる意味を有する」（柁山 2012: 69）パターンが検討されている。例えば「わらう」は（39b）においてヲ格名詞句で表される動作の向かう先を蔑んで〈嘲る〉が表される。対してヲ格名詞句を取らない（39a）は文脈に応じて〈嘲る〉を表すことも可能だが、可笑しさや恥ずかしさに起因する動作も表され、〈嘲る〉だけに限定されない。また「きく」は（40b）では二格名詞句の動作の受け手に〈尋ねる〉動作が表され、（40a）とは異なる語義が認められる。このように、現れる名詞句の異なりによって多義性が認められる。

- (39) a. 太郎が笑った。〈笑顔を作ったり笑い声をあげたりする〉
 b. 太郎が次郎を笑った。〈嘲る〉
- (40) a. 太郎が物音を聞く。〈音や声を感じ取る〉
 b. 太郎が答を友達に聞く。〈尋ねる〉（仁田 2010: 86 下線と山括弧は筆者による。）

格体制の異なりは名詞句を取る用言に適用可能な手法のため、名詞には適用できない。用言である形容詞には動詞と同様に適用できると考えられる。例えば「あかるい」は（41b）のように二格名詞句が現れることで〈詳しい〉が表されることから、格体制の異なりによって多義性が認められる。

- (41) a. 夏は7時でもずいぶんあかるい。〈光がある〉
 b. 太郎は子どもなのに世界情勢にあかるい。〈詳しい〉

3.4 共起する副詞の異なり

文法テストの最後に（29d）「付加詞要素の振る舞いが認定基準として働く」（有蘭 2019b: 52）ことを検討する。付加詞要素も用言の意味を充足する要素として現れ、用言に対する多義性の認定に役立てられている。高橋（2016）では「みとめる」の多義性を認める基準の一つとして（42）のように副詞「仕方なく」が共起できるかをあげている。「仕方なく」が共起できれば、使役者による行為の強要によって、（42a）のように被使役者「次郎」の立場からは本心に反して強制を受け入れていることになる。（42b）では使役者「彼」が直接的に受け入れることを強制しているわけではない。実力を裏打ちする実績を通して間接的に判断が引き起こされているため、「仕方なく」が共起できない。共起する副詞に対する容認可能性の違いから、多義性が認められる。

- (42) a. 次郎は仕方なく罪を認めた。〈外部の状況（他者の意見・指摘なども含む）を〉〈妥当なものとして〉〈受け入れる〉
 b. ?? 選考委員は仕方なく彼の実力を認めた。〈他者の能力や（他者の能力の反映である）作品を〉〈価値のあるものとして〉〈受け入れる〉（高橋 2016: 5 山括弧は筆者による。）

また早瀬（2018）では「みる」が〈視覚で知覚する〉と〈見張る〉という多義性を有すること

を、(43) のように共起する副詞の異なりを利用して認めている。

- (43) a. 窓の外を(ぼうっと)見ていた〈視覚で知覚する〉
 b. このカバン、#(ぼうっと)見ていてね〈見張る〉

(早瀬 2018: 31 山括弧は筆者による。)

有菌(2019a)もまた「あたる」の多義性が共起できる副詞の違いから認定できることを(44)のように示している。

- (44) a. 天気予報がぴったり当たった。〈判断が狙った通りに現実と一致する〉
 b. * 宣伝がぴったり当たって、商品が飛ぶように売れた。〈計画・活動がうまくいく〉

(有菌 2019a: 527 山括弧は筆者による。)

共起する副詞の異なりもまた用言に適用可能な手法のため、名詞には適用できない。形容詞は(45)のように味覚や色彩などについて使われる副詞によって、「あまい」に〈糖度が高い〉と〈未熟だ〉という複数の語義が認められる。ただし有菌(2019b)も述べているように、付加詞要素自体が多義的に用いられる場合がある。また形容詞は拡張した語義も段階性を有し、複数の語義間で同じ副詞を共起できることが多いため、適用できない場合もある。

- (45) a. 生ハムの脂肪はほんのりあまい。〈糖度が高い〉
 b. * 彼の考えはほんのりあまい。〈未熟だ〉

4. 論理テスト

最後に論理テストを取り上げる。論理テストは文中で語を二つの意味で使用することで多義性を認める手法である。この仕組みを利用した手法として(46)が提案されている。なお(46a)等位接続による一方の否定そのものが論理テスト(Logical Test)(早瀬 2018)と呼ばれることもあるが、本稿では多義性を要因として文に論理的な矛盾を生じさせないことを利用する手法を論理テストと呼ぶことにする。論理テストは文法性を判断するものではないため、品詞による適用範囲の違いはない。ただし、適用の可否はテストごとに差異があるため、それぞれの仕組みから検討していく。

- (46) a. 等位接続によって一方を否定し、もう一方を肯定できる。(Quine 1960, 松本 2010)
 b. 統合テストで容認可能性が低い。(松本 2010)
 c. くびき語法や兼用法といった修辞技法で文が作れる。

(Cruse 1986, 早瀬 2018, 小松原 2016)

なお、論理テストは先にあげた語彙テスト・文法テストとは性質が異なる。三つのテストはいずれも多義性を認定するために編まれた言語学的テストだが、語彙テストと文法テストが多義語である証拠を積み重ねるテストであるのに対し、論理テストは単義でないことを確認するための

テストである。ただし、論理テストに違反することが単義を決定づけるわけではないため、本稿では語彙テストと文法テストに並べて扱う⁵。

4.1 等位接続による一方の否定

(46a) は「同じ語を異なる意味で用いた場合に真偽が独立していることを利用するもの」(松本 2010: 25) である。等位接続によって一方の語義を否定し、もう一方の語義を肯定する文の容認可能性が高いとき、多義性を認めることができる。同じ語義であれば、肯定と否定が両立することで矛盾が感じられ、容認可能性は低くなるはずである。例えば (47) のように *light* が〈軽い〉と〈明るい〉という複数の語義を有していることは、同一の個体に対する描写を等位接続し、一方の語義を否定できることから確認できる。この手法の名称は統一されておらず、論理テスト (Logical Test) (早瀬 2018) のほか、曖昧性のテスト (Ambiguity test) (Cruse 2000)、分離テスト (松本 2010) とも呼ばれている。

(47) Dark feathers are light, but not light. (Quine 1960: 129)

松本 (2010) はこの手法により (48) のように「おきる」, 「学校」に対して多義性を認めている。

- (48) a. 太郎は起きて (=目覚めて) いたけど、(横になっていて) 起きて (=身を起こして) はいなかった。
 b. 学校 (=校舎) がなくても学校 (=学校活動) はある。
 (松本 2010: 25 下線は筆者による。)

また松本 (2010) は (49) のような多義性を有する「目」において、(49a) の〈視覚器〉という語義は人間か動物かで語義が区分されないことを、(50) のように等位接続によって一方を否定する文の容認可能性が低いことから導いている。

- (49) a. {彼／フクロウ} は目が大きい (〈人間・動物の視覚器〉)
 b. 彼女は目がいい (〈視力〉)
 c. 彼は彼女から目を離れた (〈視線〉)

⁵ Taylor (2012) は論理テストの有用性が次の三つの点で限定的であると述べている。一つ目は自己包摂性の問題である。より一般的な意味とそれに含まれる具体的な意味を併せ持つ自己包摂性のある語の意味に対して論理テストは (v) のように信頼できない結果を出す。二つ目に論理テストは曖昧性を発見するためのテストであって、曖昧の源が何であるかについては明らかにしない場合があることを指摘している。(vi) のように論理テストを合格したとしても、この解釈が何によってもたらされたかはテストによって明らかにされない。三つ目はテストに適切な文を作ることが難しい点である。三つ目については本文中で論理テストの適用の可否を検討する際、改めて触れる。

(v) *I stayed there for a day (=the period of daylight) but I didn't stay there for a day (=a twenty-four hour period). (Taylor 2012: 222)

(vi) I left the university a short time ago but I did not leave the university. (1時間ほど前に大学のキャンパスから立ち去った／二、三ヶ月前に大学を辞職・退学・卒業するなどして関係が終わった)

d. さいころの目／台風の目 (〈形などが目に似ているもの〉)

(松本 2010: 23 下線は筆者による。)

(50) (フクロウの目を指して)

* これは目だが (フクロウは人間ではないから) 目ではない。

(松本 2010: 25 下線は筆者による。)

ただし、この手法のために作成された文は「このような文は紛らわしい文であるため、普通に発話されることは少ないであろうが、論理的なテストとして解釈が可能である点が重要である」(松本 2010: 25) とされる。またこの手法は (51) のように同音異義語にも作用するため、同音異義語でないことを別途確認する必要がある。(51a) では〈生徒〉と〈瞳孔〉, (51b) では〈耳〉と〈トウモロコシの実〉という関連性の感じ取れない同音異義に対してテストが作用している。

(51) a. This is a pupil (=student), but not a pupil (=of the eye).

b. This is an ear (as a body part), but not an ear (of the corn).

(早瀬 2018: 32 下線は筆者による。)

4.2 統合テスト

次に (松本 2010) で提案される, (46b) 「2つの意味が統合可能かどうかをテストする」手法を検討する。「統合テストに合格するなら、テストされている2つの用例は1つの意味にまとめることができる」(松本 2010: 26-27) とされる。統合テストでは一つの語が同時に異なる意味を担えないことを利用し、文の容認可能性の低さから多義性が認められる。「うつ」は目的語を等位接続する (52a) でも目的語を比較する (52b) でも〈手あるいは手に持つ道具で [目的語ほかの物体に] 物理的なダメージを与える〉と〈[目的語作戦などを] 講じる〉を同時に表せないことから、多義性を認めることができる。

(52) a. * 太郎は、次郎の頬と次の対策を打った。

b. ?? 次の対策は、次郎の頬と同じくらい、打つのが難しい。

(松本 2010: 26 下線は筆者による。)

(52) のような同時使用のほか、照応と省略でも同様の仕組みで多義性が確認できるという。照応では it, do so, 「それ」, 「そうする」などの表現が先行する要素と同じものを受けることを利用する。(53a) では newspaper が〈新聞社〉と〈新聞紙面〉を, (53b) では school が〈学校経営者〉と〈校舎〉を照応によって統合できることから多義性が認められない。

(53) a. The newspaper has decided to reduce its size.

b. The school says it will undergo a major reconstruction.

(松本 2010: 26 下線は筆者による。)

(54) は省略による統合テストである。(54a) のように容認可能性の高さから、〈手に持つ道具

で〔目的語ほかの物体に〕物理的なダメージを与える〕と〈手で〔目的語ほかの物体に〕物理的なダメージを与える〕を一つの語義にまとめられる。(54b)のように容認可能性の低さから、〈手あるいは手に持つ道具で〔目的語ほかの物体に〕物理的なダメージを与える〕と〈〔目的語作戦などを〕講じる〕を一つにまとめられず、多義性が認められる。

- (54) a. 太郎は、野球のボールを打った。すかさず次郎の頬も…。
 b. *太郎は、野球のボールを打った。すかさず次の対策も…。

ただし、統合テストで容認可能性が低いからといって多義性によるものだと結論できないという。容認可能性が低い理由には多義性だけでなく、文脈的な制約も考えられるためである。例えば(55a)の等位接続は容認可能性が低いだが、この理由は「ボール」と「ホームラン」の異質性によるものだという。この異質性を解消する文脈を整えた(55b)であれば容認可能性が上がるとしている。

- (55) a. *野球のボールとホームランを打った。
 b. ホームランどころかそもそも野球のボールを打ったことがない。

(松本 2010: 27 下線は筆者による。)

4.3 修辞技法

論理テストの最後に(46c)くびき語法や兼用法といった修辞技法による多義性の認定を検討する。まずくびき語法は「くびき用法(zeugma)によるテストによれば、多義(polysemy)を成す2つの異なる意味を等位接続させることができない」(早瀬 2018: 32)ことを利用する。くびき語法とは二つ以上の文を単一の述部で受ける修辞技法だが、一般にこのような文は不自然に感じられる。例えば(56)のように一つの述部に対して項を等位接続させられるかを確認したとき、(56a)ではアーサーと彼の自動車がそれぞれ expire 〈息を引き取る〉、〈失効する〉という状態にあることを一つの述部に受け持たせることはできない。同様に(56b)では〈価値がある〉と〈上方向に隔たりがある〉という複数の語義を等位接続できない。なお(56c)では「たかい」が〈価値がある〉という単一の意味のため、等位接続できる。ただし、Tuggy (1993), Geeraerts (1993), Taylor (2003)で議論されるように、名文句などにはくびき語法を修辞技法としてあえて用いるものがあるほか、駄洒落が好きな人には好まれ、テストを通過することがある。

- (56) a. Arthur and his driving licence expired last Thursday. (Cruse 1986: 13 下線は筆者による。)
 b. ??このお酒とあのビールは高いね。
 c. このコーヒー豆とあのカップは高いね。

(Cruse 2011 片岡(訳): x 下線は筆者による。)

反対に、兼用法はカテゴリーが異なる複数の語を無理に一つの述語で受ける言語操作で矛盾感を引き起こし、(57)のように特殊な効果をねらう修辞技法(中村 1991)である。この仕組みを

利用し、多義性の認定に応用できる。兼用法は一つの形式に文字通りの意味と隠喩の意味、二つの意味を前景化させ、多義性を利用することがある（小松原 2016）。意味の二重性を作り出すプロセスからその逸脱性を感じ取れば、多義性を認められる可能性がある。小松原（2016）によれば、多義性を要因とした兼用法は生産的で、日常的な言葉遊びのパターンに観察される。

- (57) a. 車や飛行機の飛ぶ便利な世の中になった。 （中村 1991: 357 下線は筆者による。）
 b. その顔が石鯨と撰津大掾を聞こうという希望との二つで、有形無形の両方面から輝いて見える。 （夏目漱石『吾輩は猫である』 下線は筆者による。）

ただし、謎かけといった形式の類似による言葉遊びから、同音異義語もテストを通過する。また同音異義語を別途排除したとしても、テストの適用には困難点がある。修辞技法は「スピーチとスカートはみじかいほうがいい」のような有名な乾杯の音頭がある一方で、作例と修辞技法による効果の評価が難しいためである。

5. おわりに

最後に名詞・形容詞・動詞に対する語彙テスト・文法テスト・論理テストの適用範囲を表1にまとめる。

表1 各テストの適用範囲

手法		名詞	形容詞	動詞
語彙テスト	上下関係の異なるレベル	○	△	△
	異なる反義語	△	○	△
	異なる反対語	△	×	○
	異なる類義語	○	○	○
	異なる上位語	○	×	△
	異なる表記	△	△	△
文法テスト	形態的な異なり	×	△	△
	用法上の制約の異なり	○	○	○
	格体制の異なり	×	○	○
	共起する副詞の異なり	×	△	○
論理テスト	等位接続による一方の否定	○	○	○
	統合テスト	△	△	△
	修辞技法	△	△	△

○：適用できる。△：適用できる場合がある。×：適用できない。

それぞれのテストは品詞によって適用範囲が異なる。また認められる語義の粒度も異なる。早瀬（2018）も指摘するように、分析の対象となる意味そのものが柔軟であるために、言語学的テストでは適用範囲が限定されたり機能が剛柔であったりと、ただ一つのテストでは区分の妥当性が懸念されることが多い。語に応じた適用範囲のテストを複数用いることで、実証的に多義性が認められると考えられる。

参考文献

- 有菌智美 (2019a) 「多義動詞の語義認定における付加詞要素の役割」『日本認知言語学会発表論文集』19: 525-530.
- 有菌智美 (2019b) 「多義動詞分析における付加詞要素の重要性」ブラシャント=バルデシ・柁山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也 (編) (2019) 51-67.
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論』東京：大修館書店.
- 奥田靖雄 (1985 [初出 1967]) 「語彙の意味的なあり方」『ことばの研究・序説』3-20. 東京：むぎ書房.
- 加藤祥 (2019) 「表記によって異なる語義を読み取るのか—多表記多義語実態調査の試み—」『ことばと文字』12: 86-94.
- 加藤祥・浅原正幸・山崎誠 (2019) 「分類語彙表番号を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍・新聞・雑誌データ」『日本語の研究』15(2): 134-141.
- 木下りか (2019) 「多義動詞における中心義のずれと語義の文体的特徴—通時の変化を背景とした共時的意味の特徴—」ブラシャント=バルデシ・柁山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也 (編) (2019) 85-102.
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』東京：大修館書店.
- 小松原哲太 (2016) 『レトリックと意味の創造性—言葉の逸脱と認知言語学』京都：京都大学学術出版会.
- 鈴木重幸 (1989) 「奥田靖雄の言語学—とくに文法論をめぐって—」言語学研究会『ことばの科学 3』23-51. 東京：むぎ書房.
- 瀬戸賢一 (2014) 「語の多義性から見た文法構造」『関西英文学研究』6: 339-346.
- 瀬戸賢一 (2020) 『日本語のレトリック』東京：岩波書店.
- 高橋圭介 (2016) 「文法的振る舞いに着目した多義的別義の認定」『人文論究』86: 1-10.
- 竹沢幸一 (2001) 「日本語の状態記述二次述部と品詞分類—記述的考察を中心に—」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書』平成 12 年度 4(1): 237-264.
- 田中茂範 (1987) 「多義語の分析—コアとプロトタイプ—」『茨城大学教養部紀要』19: 123-158.
- 中村明 (1991) 『日本語レトリック体系』東京：岩波書店.
- 中本敬子・野澤元・黒田航 (2004) 「動詞“襲う”の多義性—カード分類と意味素性評定に基づく検討—」『日本認知心理学会第 2 回大会発表論文集』38.
- 西尾寅弥 (1972) 『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』東京：秀英出版.
- 仁田義雄 (2010 [1977 初出]) 「多義性を有する用言についての二三の考察—Lexico-Syntax の姿勢において—」『仁田義雄日本語文法著作選第 3 巻 語彙論的統語論の観点から』東京：ひつじ書房.
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』東京：明治書院.
- 早瀬尚子 (2018) 「言語表現の意味とその指示対象」早瀬尚子 (編) 『言語の認知とコミュニケーション—意味論・語用論, 認知言語学, 社会言語学—』29-44. 東京：開拓社.
- 飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京：東京堂出版.
- ブラシャント=バルデシ・柁山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也 (編) (2019) 『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』東京：開拓社.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』東京：くろしお出版.
- 松本曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 第 1 巻 (語・文と文法カテゴリーの意味)』23-43. 東京：ひつじ書房.
- 柁山洋介 (1993) 「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐって—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1: 35-57.
- 柁山洋介 (1995) 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際—意味転用の一方向性：空間から時間へ—」『東京大学言語学論集』14: 621-639.
- 柁山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明 (編) 『認知言語学論考 (No.1)』29-58. 東京：ひつじ書房.
- 柁山洋介 (2012) 「多義語における統一的関係と多義的別義の関係」『名古屋大学日本語・日本文化論集』19: 67-87.
- 柁山洋介 (2019) 「多義語分析の課題と方法」ブラシャント=バルデシ・柁山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也 (編) (2019) 32-50.
- 八亀裕美 (2003) 「形容詞の評価の意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15: 13-40.
- 山崎誠 (2011) 「多義語を構成する意味の使用傾向—品詞と活用形による違い—」『言語処理学会第 17 回年

- 次大会発表論文集』659–662.
- 李在鎬・鈴木幸平・永田由香 (2007) 「動詞「流れる」の語形と意味の問題をめぐって」『計量国語学』26(2): 64–74.
- Cruse, D. Alan (1986) *Lexical semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, D. Alan (2000) Aspects of the microstructure of word meanings. In: Yael Ravin and Claudia Leacock (eds.) *Polysemy: Theoretical and computational approaches*. Oxford: Oxford University Press. 30–51.
- Cruse, D. Alan (2011) *Meaning in language: An introduction to semantics and pragmatics*. 3rd Edition. Oxford: Oxford University Press. (片岡宏仁 (訳) (2012) 『言語における意味 意味論と語用論』東京：東京電機大学出版局.)
- Geeraerts, Dirk (1993) Vagueness' puzzles, polysemy's vagaries. *Cognitive Linguistics*. 4: 223–272.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: Chicago University Press. (池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田禎之 (訳) (1993) 『認知意味論：言語から見た人間の心』東京：紀伊国屋書店.)
- Quine, Willard Van O. (1960) *Word and object*. Cambridge, MA.: MIT Press. (大出晁・宮館恵 (訳) (1984) 『ことばと対象』東京：勁草書房.)
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic categorization: Prototypes in linguistic theory*. 3rd Edition. Oxford: Oxford University Press. (辻幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実 (訳) (2008) 『認知言語学のための14章』第3版. 紀伊国屋書店.)
- Taylor, John R. (2012). *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford: Oxford University Press. (西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫編 (訳) 2017 『メンタル・コーパス—母語話者の頭の中には何があるのか—』東京：くろしお出版.)
- Tuggy, David (1993) Ambiguity, polysemy, and vagueness. *Cognitive Linguistics* 4(3): 273–290.

The Effectiveness of Linguistic Tests for Identifying Polysemy in Nouns, Adjectives, and Verbs in Contemporary Japanese

NISHIUCHI Sae

Hokkaido University of Education / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This study discusses how polysemy in words can be identified, with a particular focus on linguistic methods. Polysemy is defined as the phenomenon in which two or more semantically related meanings are associated with the same word or form. Since the degree of granularity with which a word is treated as polysemous depends on the purpose of the research or the standpoint of the researcher, various approaches have been devised to recognize several meanings of polysemy, from both a linguistic and a psycho-experimental perspective. The linguistic methods developed in previous studies are reviewed for identifying polysemy in a word, classifying them into lexical, grammatical, and logical tests, and examining the extent of their effectiveness. We analyzed the mechanisms of each test and discussed their features in terms of the degree of granularity of meaning. The parts of speech for which each test is effective are also examined, mainly noun, adjective and verb of Contemporary Japanese, and the extent to which each test is applicable is described.

Keywords: polysemy, vocabulary test, grammar test, logical test, Contemporary Japanese